

浄土

十二月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雑誌第三五二号)
昭和四十五年十一月二十五日印刷 昭和四十五年十二月一日発行

第三十六卷

第十二号

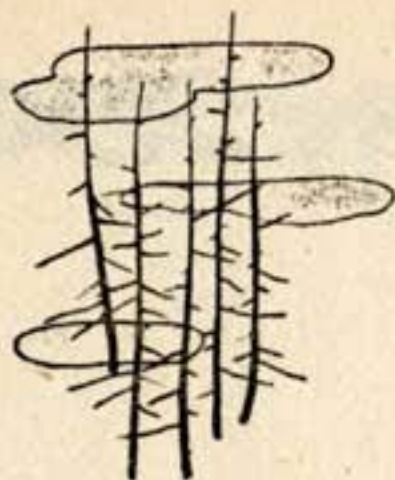


目次

表紙「かぶ」松涛達文画

成道会を迎える頃	佐藤成順	(2)
座談会『青年と宗教』		(5)
合掌のころ—法然上人と熊谷直実—	宝井馬琴	(10)
インドでの旅日記(5)	佐藤治子	(16)
真実に生きる	矢代栄信	(22)
和来ばなし かえらぬ帽子・借り一文なし・悪事露見・逆襲・馬からの電話		(26)
ふる里紀行(3) 東北の2	青柳良憲	(28)
「道」(8) 勝林院への道	高橋良和	(29)
宝物シリーズ(12) 法然上人立像(鏡の御影)		(32)





今月のことば

秘

義

芸道には奥伝とか秘伝とかいって、芸の極意をそれによって伝える工夫がこらされていますが、宗教の世界にもそれと似た考案がしばしば見られることです。

里宮、本宮、奥の院といった構えもそうでしょうし、四万六千日とか五日市といった縁日とか、また御開帳などの設けられるのも同様でしょう。ただ宗教の芸道と違うのは、望めば誰でもが加わり得ることです。それは宗教が万人のものだからです。

この秋の終り頃、講中と一緒に善光寺へ参詣しました。本堂での特別法要後御開帳があって一光三尊の善光寺如来像を拝み、一同うち連れて所謂戒壇めぐりをします。通常過去の罪穢れを払って新しく生れかわるとする神道系の胎内くぐりと匹敵する儀式ですが、しかし内実は全く違います。というのは、日本最初の伝来仏である阿弥陀三尊像を秘めた龕を封ずる独鈷型の錠前に触れることが、参詣者の最大の目的だからなのです。

それは、何故なのでしょう。それこそお手つきで、阿弥陀さまとしかと手をつないで結ばれることを現わすとか、解しようはないでしょう。仏教の秘義は、実は人生の真髓を解き明かす以外にありません。生きとし生けるもの、すべてのものの真実の大御親である無量寿・無量光のみ仏と、親しく手を取りあい、み仏の導きを確認する以外に、私共の生きる道はないのです。これこそが戒壇めぐりの秘義でなくて何でしょう。このことなくして人生は闇に等しい。生の真実に盲目の我等なればこそ闇黒の道を辿り、仏に触れ得て後、始めて光明の世界に導かれるのです。

今年も除夜の鐘に去ろうとしています。人間のエゴイズムからする争いと醜惡、この闇黒の迷い、百八煩惱をうち払って、輝かしい明日の希望と祥福の生に向って新たな歩を進めかし、と、全国の多くの寺々で今年も警めの梵鐘が打ち鳴らされることです。(中村康隆)



成道会を迎える頃

佐藤 成順

(大正大学講師)

いざというとき知っておかなければならない心得を書いた塩月弥栄子女史の「冠婚葬祭入門」がベストセラーになった。衣食足りて礼節を知るの古語ではないが、大平の世が続き、経済的に落着いてきたこのごろ、戦後のどさくさ時に一度は破壊されかかった形式的な儀礼が見做されるようになったためだろう。時流にのった「冠婚葬祭入門」は映画化されてついに喜劇になってしまった。適度に礼儀をわきまえていれば、他人の感情を害さないし、人間関係の潤滑油の役目をはたすことはたしかだ。社会人としての化粧にもなる。しかしそれも度が過ぎたり、平素の心がけや人柄とあまりにもかけはなれていたり、日頃の行動とふつりあいなことをすると、せつかくの儀礼もはた目には喜劇に見えてくる。やはり外見上のかたちを支える心がなければせつかくのかたちも生きてこないということなのだろう。

心といえど、現代社会のなかで見失なわれがちな人間の心をみつめて描いた高田好胤師の「心」も、今年の出版物ではよく読まれ、新聞の読書調査では感銘を受けた本として評判が高かった。「冠婚葬祭入門」と「心」それは、いわばかたちと心だ。この両方が今年のベストセラーであったのは興味深い。よく読まれる出版物の傾向は、世の中の人が要求する方向を示しているに違いない。最近、形式的な人間関係の儀礼を大切にする気風が高まっていると同時に、一方では、内面的な人間性に関心がもたれてきているようだ。



それはともかく、冠・婚・葬・祭は、日本人の習慣としきたりのなかに生きてきた四大儀礼であり、また、誕生と結婚と死とは人生の三大事である。人の経歴は、その人の才能や努力や運によって色々違う。けれども、この三大事だけはほとんどの人が一度は経験する。そして、大方の人間は、一生の間に経験する重大な出来事といえば、結局、この三つにつきてしまう。

しかし、宗教的偉人の場合は、月並の人間とは異なって別の大きな出来事を経験している。釈尊は、八十年の生涯に、四つの大きな出来事を経験された。誕生と成道（さとりを開くこと）と初転法輪（はじめて人に法を説いたこと）と入滅、これも四大仏事と呼んでいる。

釈尊は、インドのマガダ国の王子として生れ、幸福な少年時代をおくり、成人して美しいヤソダラ姫と結ばれた。そのまま城に止まり一生を終ってしまえば、月並みの人間と変わりなく、勿論、仏教も生れることはなかった。しかし生れながらに宗教的感受性のそなわったこの王子は、平凡な生活に安住できず、道を求めて出家した。永い年月修行を積んで、ある日、ブツダガヤの菩提樹の下で、ようやく自分の求めていた真実の道をさぐりあてた。さとりを開いた。この日が成道の日だ。仏教が釈尊の心のなかに誕生した劇的な記念すべきときであり、経典にはこのときの様子を色々に描いている。釈尊の成道を記念して、昔しから十二月八日に法会を行なっている。

今年もおしせまってもうあと幾日もない。年が改まったところで格別どうということもないが、毎年、年頭には、日本人の感情にならって人なみに今年こそは充実した一年をおくろうと姿勢を正す。けれども、春になるころにはその記憶もだんだん遠くなり、夏にな



れば暑さにかくれてそんなことはすっかり忘れてしまう。無駄に時間を過ぎて大づめまできてしまう。成道会そして仏名会を迎えるころともなると、急に年末を感じ、反省ともあせりともつかない妙な気分になる。寺に育った人間の特有な季節感とでもいうのか、施餓鬼や盂蘭盆のお経を聞くと、自然に夏だなあという季節感がわき、仏名札餓の声を聞くと不思議に年の暮れの実感がわいてくる。

年末は、一步街に出れば、喧騒と雑踏に悩まされる。普通なら三十分で行けるところも倍近い時間がかかる。平素はとくに繁華街が嫌いなわけではないが、暮れの雑踏とあわただしい気分には閉口する。誰れしも好き好んで忙がしい思いをし、雑踏の中を駆けまわっているわけではないだろうが、社会的な習慣が自然にそういう形にきめてしまっているのだ。世のなかが安定すると習慣や制度が固定化すると識者はいう。既成の社会の枠のなかで生きている以上この年中行事もまたやむをえないことかもしれない。しかし、こうしたときにこそ、月並な人生の殻を破った釈尊の成道の意味を考えると、社会の風潮の歯車にふりまわされている自分の姿の歯止になる。また、仏名会のゆったりとした札餓の声を聞くと気持が落ちつく。年の瀬にも心を休めるオアシスはある。

仏名会は、仏のみ名を称え、みずから犯した罪を仏に懺悔する行事として興った。罪とか懺悔とかいうと、一般的になじみにくい印象を与えるというならば、自分を反省してみる機会だといってもいいだろう。とくに年末に日を定めて仏名会を修するようになったのはいつのころからか知らないが、やはり理由のあることなのだろう。この一年間の我が身を反省し、気持の大掃除をするよい機会だ。さっぱりした気持で新年を迎えるのは悪いものではない。

座談会 「青年と宗教」

宗教体験で得たもの

司会 本日は「青年と宗教」と題して、大学に学ぶ皆様方が日頃宗教に対してどのような考えを持っているか、また今後何を希望し、期待しているかなどについて率直な気持ちを聞かしていただきたいと思います。ここに出席の皆様はこの夏大学の実践仏教に参加された訳ですが、寺族の方、在家の方それぞれ違った思いで体験されたと思いますので、その受講の動機や感想からお聞きしたいと思います。

箕輪 私の場合は特殊な事情により僧侶になろうと決めましたので、ほかに考えもありませんが、僧階の単位を取るための手段として受講いたしました。

栗田 私は在家ですの、友人に物好きといわれましたが、宗教とは何か、信仰とは何かという場合、体験がなにより必要と考えましたので受講いたしました。

石川 一口にいえば精神修養になると思っただけです。

伊藤 私の場合は、寺に生まれながら小さい頃よりあまり体験がありませんでしたので、この一週間の受講に期待しておりましたし、成果を充分にあげることができたと思っております。

鈴木美 はっきりいって興味以外の何物でもないといえます。私は高校がミッション系の学校でしたので、そうした経験が多いにもかかわらず分らずじまいで来てしまいましたので、宗教とは何か、仏教とは何かということよりも、仏とは何かということを知りたいと思いましたので受講いたしました。

司会 分りましたか。

鈴木美 分りませんでした。何ら偏見なく素直な気持ちをもつようにはなりました。

鈴木恵 私は純粋な気持ちでこうした経験を

してみたいと思ったからです。

大平 大学に四年の間、ある意味では遊ぶ時間は充分にありますが、引きしまるという時間も大切と考えましたので。

司会 今、皆様からいろいろな受講の動機をお話しいただきましたが、その中から得られたものは何だったのでしょうか。

大平 最近、僧侶が腐敗堕落したといわれますが、実際にはそうとまでいえないと思われる姿を見、また信者の方々の実に真剣な姿に接し得たという、いままで考えてもいなかった世界もあるのだということを知ったこと。私自身には実に貴重な精神修養になったと思います。

司会 確かに男子実践仏教では比叡山黒谷青竜寺で特殊な体験（このことは浄土宗新聞・中外日報などで既報）がありましたから。

箕輪 そうですね。あの青竜寺での猛烈な

信者の姿に比して、僧侶になろうとしている私たちの方が何か信仰という面では薄いという気さえます。はたして将来浄土宗の宗侶としてやっていくことができるのかどうか、また浄土宗としても、あのような熱心な信者の方々を充分指導していくことができるのかどうかという点で、危機感のようなものを覚えしました。

司会 栗田さんは俗人という立場から、どのようにお考えですか。

栗田 私も人のことはいえませんが、わずか一週間たらずの修業で足が痛いのか何かいう、これから僧侶となる人であれば、もっと自分に対してきびしい面が必要ではないでしょうか。自分に勝てなくては人々を導くことはできないと思います。

司会 鈴木さんはミッション系の高校を終えたそうですが、そのことなどからどのような感じを持たれましたか。

鈴木美 たとえば食事の前の合掌、廊下を合掌しながら行列を作って行くことなど、はじめは上から押しつけられた行ないであり、何の意味があるのかなどと、抵抗心が強くあ

出席者（大正大学生）

伊藤 匡 頤

（浄土学大学院修士二年・宗侶）

石川 信 幸

（国文学三年・在家）

栗田 仁

（社会事業三年・在家）

箕輪 武 男

（浄土学二年・宗侶）

大平 明 子

（日本史学二年・寺庭）

鈴木 恵美子

（社会事業二年・寺庭）

鈴木 美音子

（国文学二年・在家）

司会 編集部

りましたが、回をかさねることにそうした気持は去り、素直な気持でできるようになりました。

伊藤 私は昨年の増上寺について、今度の知恩院の実践仏教に参加したのですが、今度の方が気持の上で何か素直なところが出、実に有意義な中に過ごさせていただきました。

司会 たまたま皆様方は仏教系の大学に学び、その受けとり方はいろいろありましたが今度のような宗教体験をされました。では一般の若い人々は宗教体験をしてみたいという気持があるのでしょうか。

栗田 あると思います。ただそうした体験をする機会にめぐまれていないのが現状ではないでしょうか。ですからそうした機会があれば、やるのではないでしょうか。

若人が求めている宗教は

司会 こうした経験を望んでいる人は比較的多いのでしょうか。

鈴木美 多いと思います。今日、たよれるものがないというのが第一だということですね。昔は親は偉いものであるとか、友人は敬まわねばいけないというような、統一された

倫理のようなものがありました、今はないと思います。そしてどうしたら良いのか分らないでいるのが現状です。そうした時、絶對的に価値あるもの、やすらかなるものなど無条件にたよれるものを望んでいると思います。私はこの意味で信仰とは別になるとは思いますが、仏像とか経典とか僧侶の姿など動かないものがほしかったのです。

司会 それは今日のような自由な生活と裏腹に何かきびしいものを望んでいるということでしょうか。昔はたよるとか否は別として国家軍隊などがあり、それぬきでは考えられなかったのですが、今は確かにありませんね。国家にたよるといふのはあまり良いこととは思いませんが、そのたよとなる寄りどころを人間本来の姿の中に絶對的なものを求めるとすれば、それは人間として純粹な欲求だと思っています。

箕輪 私の場合は宗教的体験というよりは、信仰という面が先でした。

司会 それはどういうことですか。

箕輪 病気を契機として信仰の世界に入つたということです。

司会 この若さでそうした心境に至ることは大変なことと思いますが。

鈴木美 病気になるれた時に、何かにすがりたいという気持ちだったのですか。

箕輪 病気の原因が分りませんでしたので、知人のお坊さんに、はやくいえば現世利益的な希望を求めたのです。結果としては病氣は治りましたが、その辺が動機といえると思います。

司会 信仰の世界に入る動機としては、肉体的苦痛によるものと、精神的不安によるものとがあると思います。前者は比較的容易に受けとられましたが、後者は大変むづかしいと思います。殊に青年にあつては健康であれば、何ら心配もなく見過してしまふでしょう。しかし、宗教的な情操はそれらに関係なく必要なものと考えますが。

鈴木美 最終的に絶對なる境地に達するためには、どうしても宗教の世界に入らねばならないと思います。文学や哲学では解明できない部分がどうしても出てまいります。ですからいかなる時代でも宗教は必要ではないでしょうか。

司会 さて宗教の原則論のような話になつてまいりましたが、ほかの人はどのように考えますか。

大平 反発するようですが、宗教とは信じられるものであるという反面、中に入れないものであると考えます。要するに宗教には絶對なる力はないでしょうから、個々にそれを考えるべきものだと思いますが。

司会 考えるとはどういうことですか。

大平 文学や哲学では到達し得ないものを宗教で負うといいましたが、宗教とてそれ程の力はないと思いますからです。

鈴木美 宗教はご利益とは違ふと思います。それは方便として使われただけのものではないし、宗教の本質など分りませんが、例えば慈悲とかなさけというような抽象的な事は哲学では理解できないと思います。本格的に哲学を学ばず無責任な発言とは思いますが、慈悲ということを通して考えただけでは何にもならないのではないのでしょうか。仏教は慈悲の教えであるといわれますが、慈悲の意味を知らなくとも、それにすがりたいと思えば何かが開けてくると思いますし、そうした

ことより、宗教は本当に力のあるものと思います。

鈴木恵 信じるということよりは生きる上に必要なものではないでしょうか。

生活の糧としての宗教へ

司会 そうですね。生きる上で必要な宗教で良いのではないのでしょうか。信じる信じないは各々の人の信仰の深さによるものであり、その度合は異なるでしょう。しかし、そうしたことから本当の信仰の道が開けてくるのではないのでしょうか。あくまで個々の必要に応じた信仰の度合だと思います。

伊藤 これは私の経歴になってしまいましたが、大学受験の際、どこを受けるか大変迷いました。寺に生まれながら、仲々信仰心をもつことができず、その時点で寺を継ぐためには信仰の心がなければいけないと考え、私自身にはまだそれだけのものがないということ、東京教育大学に進み数学を専攻しました。しかし、大学の四年間いろいろと迷いました。そしていくら迷っていても仕方ない、やることさえやれば気持がおちつくのではないかということで、本学に入りました。

司会 栗田さんは宗教体験をしたいということより受けたと思いますが、結果としてそれは自身必要と感じたものか、それとも何んでも経験しようということからなのか、その点いかがですか。

栗田 宗教的な体験をしたいということが第一の原因です。この外に信仰するという場合知識とか何かが邪魔をするといわれることがあります。こうした気持を試してみたいようなところもありました。

鈴木美 信仰と知識というものは両立しないものなのでしょうか。

伊藤 両立しないとはいいきれないと思います。信仰をもちながらほかの知識も持ち得ると思います。

鈴木美 自分の専門の学問をしていた結果、究極的には全く別の出発点でありながら、自然宗教の世界に入っていくてしまうというのが人間の中にはあるのではないのでしょうか。

伊藤 精神的分野では確かに言えると思います。私がいいたいのは、すでに科学的に解明されていることであるにもかかわらず、信

仰という名のもとに、ある意味で旧態然としていいる部分があるということです。しかし、今では私自身もそうしたものも理解し得る心境にかわってきたことも事実です。

科学と宗教

鈴木美 欧米の科学者が熱心なクリスチャンであると共に優秀な科学者でもあるという場合が大変多くありますが、そうした科学的なものとは科学に矛盾した部分を持ち合せている宗教をどのように両立させているかということも大変興味があります。

司会 そうですね、この二つは次元が違うのではないのでしょうか。科学は科学として、信仰は信仰として各々深めていけるものではないのでしょうか。ただそれが人間の問題に來た時、肉体的消滅、いやそれは物理的な消滅にすぎないという問題に関しては大きな摩擦が生じるでしょう。これを科学だけで解決できる人は宗教はいらなくなる訳ですが、究極的には宗教によらねばならないと思います。

栗田 私の場合は素直には信仰の世界には入れないと思います。ただ何かきっかけをつかめば入れるでしょうが、今はそのきっかけ

が何であるか分らないのが現状です。とにかくなんでもやってみなければ分らないのではないでしようか。

司会 確かにそうですね。そこでこれから日本人の青年の宗教心のあり方という点でお聞きしたいのですが。

石川 私は生活のよりどころを何にするかという点で、何も持っていないとしか答えられませんか。

司会 そう、反対の立場からいえば、何も持っていないということが一番幸せだと思えます。親の暖かい慈愛のもとで何ら不自由なく暮らしてきたことにはかならないからです。しかし、反面何か精神的なよりどころを求めるのが本当ではないでしようか。

箕輪 昔の青年も今の青年も人間には変りないのですが、その育つ環境の変化によって宗教・信仰、親が示す態度などに接する機会がなくなってきたと思います。そういう意味で多少不幸ではないでしようか。

司会 逆に考えれば、そうした機会がありながら、ほかでも十分に満し得る機会も多分にあるともいえますね。昔の娯楽といえは寺

に行き、話しを聞き共に語るといふようなものでしたが、今では充分すぎる程いろいろなものがありますからね。

鈴木美 そうした事柄とは裏腹に、満されていけないという考え方もできると思います。つまり精神的な面では欠けている人が多すぎるくらいいるのではないでしようか。

司会 そうですか、ではどうすれば満たされると思いますか。

鈴木美 そういわれますと、大変むづかしいようがありませんが、そうしたものに接し得る場がほしい気がします。例えば私達在家の者は寺の門前に立った時、入って良いのか否か迷ってしまいます。何か違う世界のもののように見え、安易という意味ではありませんが、気軽に入れ、気軽に仏像を拝めるようであれば良いと考えます。

栗田 確かにそうですね。生活様式はたしかに私達在家と同じであっても、人間的には未だ高いところにいるような気がし、とり残されて来ているように見えます。ですから生活は在家と変りなくとも、人間的には確かに僧侶であるというような面を望みたいと思

います。

司会 今日的にいえば同じ土俵の上で生活するということですね。たしかにいわれる面があると思います。

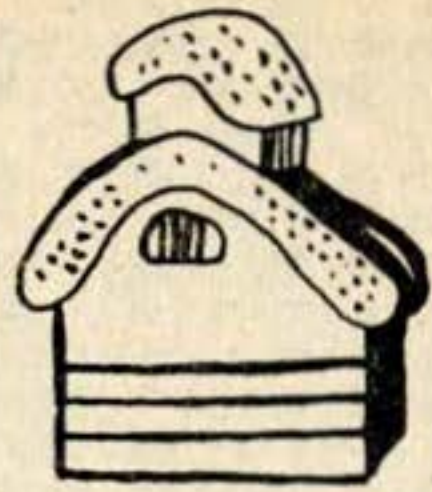
鈴木美 私はその民衆のレベルまでおりるといういい方には抵抗を感じます。その結果こびるという結果がでくると思います。

司会 聖者という面、人間という面のジレンマともいうべき点ですね。

伊藤 私の寺で知恩院の「お手つき奉仕団」を募り連れていった時のことですが、一面では信仰心をもった人々がバスの中や食事の時の念仏に抵抗心をもったようでした。しかし時がたつにつれ、掃除をしたり、話を聞くうちに信仰心が更につき、自然に念仏が称えられるようになったといっておりました。ですから半ば強制的な場合も必要ではないかと思

います。

司会 ケースバイケースで強制すべき時もあると思います。ただ門を開いていても誰も来なければ意味ありません。こうした点をいかに解決するかが、今日の宗教界の大きな問題でしよう。



合掌のころ

——法然上人と熊谷直実——

宝井馬琴

死の体験

昔に比べますと、生活環境の影響により気候もかなり変化してまいりました。私がまだ横浜の金沢に住まっております頃、十月十二日の池上の本門寺の御影式にまいりますのに、蒲田から歩く時二重まわしのマントの衿をたてて行った覚えがあります。しかし今日では十一月に入りましても、さほど寒さを感じない位であります。

また昨今マスコミでは一九七〇年代の生活様式は、世界をあげて変化するであろうと、にぎやかに取りあげております。

この点をよくお考えいただきたい、私は絶対に変わらないと思います。変ると思うのは錯覚です。一千年前も二千年前も、現在と少しも変わっておりません。といいますのは人間は生まれて来、そして死んでいくのです。この原則は少しも変わっておりません。ただ衣食の面で変化してきたにすぎません。それを変ってきたかのように見るのがすでに間違いなのです。

ですから一九七〇年代に一大変化をもたらすであろうということはあり得ないことであります。私たちは生死という動かない厳然なる事実を見つめねばなりません。ではどうしてこのように見えるのか、それはその手段・方法などの上で、勝手気ままに違っているにすぎないためであります。

歴史の上から見ましても、百年前、五百年前、千年前も少

しも變つておりません。ということは邪・し・ま・な考えを持った人は、満足ある生活をしていないということです。正しい行ないをしている人はは・た・め・には非常に気のどくであると思えても、本人にとっては満足ある生活をしているということですから。不足を感じていません。不足を感じないということはめぐまれていることになります。例えばあんなに立派な衣服が着れてうらやましいな、と思う反面、自分は身軽でよかった、あんなに重い衣服を着けて気のどくだなと思えばそれまででしょう。心持ち一つによって人間はいくらでも満足ある生活を営むことができます。

私は現在、相関して欲を持っておりません。何もほしくありません。と申しますのは、七年前に大手術を受けました。この時医者の方のちょっとした手違いで、手術後二日目に死にかけ、三日目に呼びかえされ、そしてなんとか命をとり止めました。私はこの時からものの考え方が変わりました。それまでは仏教書を読み、なんとか仏の道を歩むことができないものかと苦勞いたしました。仏教関係の小説を書く作家の方にも、なんでこんなに難しい本を読ませるのだ、もっと易しい仏の道を教えるものはないのかとたずねたりいたしました。しかし仲々得ることができません。そんな折、死にかけたこ

とによってふと分つてきたのです。

私が命を取り止めてから一週間というものは、身動き一つできず手当を受けておりましたが、この時に考えたことは、もしあの時生きかえることなく死んでしまっていたらば、ということでした。死にかけた経験を持っている人はあまりありませんでしょうが、あんなに気持の良いものもありません。ただし生きかえることができるということが前提ですが。私は冥土までまいりました。お説教などでは実に美しい世界として話されますが、そこには何もありませんでした。七転八倒の苦しみから、すーと気持がよくなり、あーこんなにすばらしい世界があるのかと考えた時、私は死を少しも恐れなくなりました。

無 欲 に な る こ と

生きかえって後、いろいろ考えましたが、今までは欲ばりすぎていた、こんなにくだらないことはないということに気づきました。この欲ばらないことこそ仏の道であるという心境になってまいりました。つまり、私は自分には少しすぎた

家だなど思いながら建てました。貯金もだいぶたまりました。しかし、これらは棺に入れてもっていくことはできません。一生を誓いあった妻、そして三人の子供たちも死んで後、一緒に連れていくことはできません。こう考えますと、私のものでありながら、そうではないのです。これらは私が生きている間の預りものにすぎないのです。そして預りものであるから粗末に扱ってはならない、そして預りものであるからそんなに欲ばっても仕方ないということが分ってまいりました。この気持こそが仏の道であろうと考えたのです。

無理をしない、目茶苦茶に欲ばらない、それまでして自分のものにしたところで、死んでいく時はおいていくのです。こう考えますと、むやみに欲ばっている人を見ますと滑稽にさえ見えます。あれが欲しいから、あれを手に入れるまでには金がかかるから、そのために金が欲しいというのは分りません。一つの望みをもっているからです。そうでない場合、なんとか金を貯めたい、金を貯めたいと他人の分までもかき集めている人もおりますが、それは少しおかしいのではないかという気持になってまいりました。

東京に住む欲ばりの話しをしましょう。その人は金がこの世のすべてであるという人ですが、人ずてに聞きますと一千

億円あまりを貯めているということですよ。ある時、知人とその人のところを伺がいました。帰り道、知人が曰く「馬琴さん、今日のカステラはかめましたね」というのです。何故かと聞きますと、いつもはいつももらったのか分らないようなカステラが出される。金槌でたたかねばならないと思っておりました由。また今日のカルピスは少しにこっていて、コップ越しに何も見えませんでしたねというのです。何故か、いつもは少量のカルピスに水を加えたのを出してくれるので、コップ越しに何んでも見える由。またこの人の総領は今日まで妻をかえること四十三人、何故か、自分の財産と同等に持っている家でないを取られる心配があるというのです。

実にえらい家があるものです。こうした暮しをすること事態、すでにおかしいのです。これほどの貧乏もまたいたないという見方さえできましょう。いくら欲ばって見たところで死んでしまえば、それで終りなのです。近年、寿命が延びたといわれておりますから、俗に人は百年生きられるといわれます。昔は食物・医学などの関係で実際は百年生きられるところを五十年で死んでいったのです。私は寿命が延びることとは百二十年、三十年生きてはじめて延びたといえるのではないかと考えます。このためには、無理をしない、欲ばら

ない、よく手当をすることだと思ひます。手当ということとは本当に身体を丈夫にするためで、とりも直さず身体が元氣であるということは、あらゆる社会のためになるのです。一家のためではありません。世の中すべてのためになるのであるから、身体は丈夫にしなければなりません。

法然上人の時代

こうしたことをふまえた上で歴史をみてまいりますと、いろいろとおもしろい事実にぶつかります。私は現在「日本および日本人」という雑誌に毎号「講釈師歴史の旅」というものを書いております。この企画は私が旅に出た所々の歴史を現在の眼で見たことなどを伝えるということではじめました。この中にも述べたことですが、その昔、家康は桶狭間の戦いで今川義元が斬られたことにより、その激しい戦いの中から、先祖七代が葬られている岡崎の大樹寺まで逃げのび、この墓前で腹を斬る覚悟を決めたのです。その時、その寺の住職登誉上人は今まで自分あつての戦をしていたから、こういう敗け戦になるのだ、戦というものは自分のためにするの

ではないといつて家康に教えたことばが、『厭離穢土 欣求浄土』であります。この世の最高の喜び、浄土を招くという、きたない世の中を厭う、こういう考え方でいくならば確らず成功するであろうと、腹を斬ることを思いとどまらせた、家康十九歳の時のことであります。その後の家康の活躍は述べるまでもありません。

人間はちよつとした指導、助言で大きく変わるものであるということをよく考えねばなりません。私が機会あることにこうした話しをいたしますのは、講談というものが決して人の道を踏みはずさないということ、それを第一の条件としているからです。それがためにあまりはやりません。あまりにも保守的だとされるからでしょう。しかしはやらないからといって止める訳にはまいりません。世の中にはまっすぐな道を歩む人もおります。しかし邪しまな道を歩む人よりは、存外眼につきにくいのが現状でしょう。人の眼につかないからと無視してはなりません。そうした行ないの人々がふえれば世の中がよくなっていくのが道理であるからです。私は講談は忙しいが、講談師がひまであるから、講釈師は考えなおさねば、というのをモットーとしておりますので、次にいろいろな事例をあげ、少しでもお役にたてばと思ひます。

今から八百年程前、どのような時代であつたでしょうか。それは浄土宗を開かれた法然上人が「一念仏を称えることによって万民が救われる」と教えられた頃であります。丁度あの牛若丸が金売り吉次に連れられて奥州の平泉に行った時です。この時代は源平の争いが起らんとしていた頃で、それまで平家にあらざれば人にあらず、といわれた程の世で、一にぎりの人々の生活のために全国民が働らかされたのであります。それではどうすれば良いのか。そんな時、そうした愚知をこぼさずにナムアマミダ仏を称えればそれでよろしい、極楽浄土へ行くことができますよ、と教えられたのです。

この法然上人が一念仏をひろめられた時、上は天皇から下は女郎・盗賊まで、あらゆる階級の人々が、成程救われない人々が集まってまいりましたから、大変な勢いとなつたのです。

念仏行者熊谷直実のこと

この一念仏が教えられてから七年目、さしもの権勢をほこつた平清盛は亡くなりました。十一年目には平家が没落して

おります。そして源頼朝の時代となる訳ですが、この源氏もわずか三代で滅亡しております。私なりに考えますならば、もう少し信仰に厚い家庭を築くことができたならば、あれほどの権勢をほこつた源氏のことですから、いとも簡単に没落しなかつたのではないかと思います。たとえば頼朝は伊豆に流されて後、勢力を得るまでの間に恩義あつた人々を殺しております。妻政子は夫亡き後、長子頼家を殺しております。それでも母としての良心のためでしょうか、亡き頼家の菩提を弔うため墓を作らせましたが、はたして頼家は受け入れたでしょうか。そして一念仏が開かれて十九年目にはあの有名な曾我兄弟のあだ討ちもありました。

そんな折、鎌倉山をひそかにぬけ出し、西に向う武士があらまりました。丁度今の国府津にさしかかった時、供の者がたずねました。「右に向えば御殿場、左に向えば足柄ですがどちらへまいりましょう」「右に向え」「その先は駿河国に入りますが、この先どちらへ」という話で二人の会話は西の国、西の国へと止どまることなく続いていったのです。そして九州をすぎ琉球、唐土に及んで来、供の者がそれではどちらに行きたいのでしょうかとたずねると、この武士は「西方極楽浄土に行きたいのだ」と答えたのであります。この武士こそ頼

朝のもとにあつて、この成功に力あつた熊谷次郎直実、その人であつたのです。

そして直実も、今は主人のもとを辞して、その救いの場を法然上人に求めたのであります。それまでの自分の数々の悪事を上人にぶつけましたところ、ただ一言「ナムアミダ仏を称えれば救われる」とさとされ、三日三晩涙を続けたと伝えられる豪の直実の念仏門帰入の一節であります。

今は前後して浄土宗が開られました頃の歴史話をしましたが、こうした時代が法然上人を生んだともいえましよう。そしてその上人のもとへ飛びこんで来たのが親鸞上人であります。僧侶のまま妻帯できるか否か、法然上人に気持のもち方一つでできると誠されことはあまりにも有名な話です。同じ頃日蓮上人が出ましたが、上人は女の話がいくら文献を探してもありません。創価学会のある信者は生まれながらにして仏さまだからだといっておりました。

とんでもありません。生れながらの仏さまはおられません。人間が難行苦行の結果、道をつかみ、徳をつみ、上人と呼ばれるようになったのですから、私たちも素直に従い、尊敬できるのであるということを、もう一度考えなおしてみたいものであります。そうすることによって私たちもやがて仏になれ

るのだ、ということを考えますと、成仏する時も気持よく、いい心持ちで死ねるのではないかと考えます。どうしても私たちは死んでいくからです。

さて、この生きている間は、何とか道を正しく歩いて、やがては立派な仏になれるような行動をしたならば、日本ももっと住みよくなるのではないかと思います。そのためには、これからの世の中を背負って立つ若人に何を教えたならばよいのか、この点を仏教界の人々に考えていただきたいのです。私は、それは手を合わせるということ、この簡単な動作につぎると考えます。その第一は家庭の朝の挨拶からはじめたら良いと思います。両親への挨拶は何ら抵抗なくするでしょう。こうしたことから、手を合わせる習慣を身につけさせれば、やがてこのことより世の中に役立つ若人を育てることができましよう。

この合掌する心を育てることが、今後の宗教界とりわけ仏教に残された唯一の道であると確信いたしております。

Ⅱ 川崎市教育委員会・同仏教会共催の

「川崎市宗教文化の集い」講演要旨Ⅱ

(文責編集部)



お釈迦様ご誕生の地ルンビニ
産湯に使われたという池

佐藤 治子

|| 第五回 ||

インドでの旅日記

「ルンビニへ」

二月二十日、朝もやの深いクシナガルを出発。車も除行。一緒に出発したはずの二台の車ももやに包まれ見えなくなっ
てしまった。運転手は温厚な人で運転も慎重で心配はない。
けれど何かブツブツぼやいているかのよう一人言をいつて
いる。何か気になって仕方がない。助手席にいる通訳の人に
何をいつているのかしらときいてみた。それは朝のお祈りだ
ったのだ。耳をすますと小声で節をつけて祈っている。私も
何かしら厳肅な気持になっていく。「奥さんは歌をお好きで
すか？」お祈りがすんだのであろうか、この人は突然英語で
私に語りかけた。「え、好きよ」と答えた私に次々と静かに
哀調を帯びた歌をうたってくれる。

もやは少しづつ薄れて行く。径の両側の立木も姿を現わし
出した。あちこちに水たまりができていく。昨夜来の大雨に
ほこりどころか水たまりがあちこちにもこちにもできてい
る。このドライブコースがマスクを必要とする道であったの
だ。ルンビニへ往復する時は身体中がほこりっぽくなるとき
かされていたのに、ほこりをたてるはずの車はピシヤンピシ
ヤンと水をはね上げ、走って行く。

晴れ上っていく田舎道の両側の立木もすがすがしい。アッ

！サル！アッ！あそこにも！銀色の毛のサルは車の音であわてて木へかけ登る。運転手も「マダム。サルがいますよ」と徐行してくれる。急いでカメラを向けたが、銀色の長い尾がちらとレンズに写った位、すばやく皆かくれてしまった。

十二時半。いよいよネパール領へ近いらしい。インド領を仮出国する手続きの為、小さい村の中にある事務所へよる。近くの川で数人が布をたたきつけるようにして洗濯している。川べりの土堤には色とりどりの布が一杯ほしてある。まつ青な空の下に白、赤、ピンク、グリーンの色の洗濯物！写真をとりたい。カメラをとり出した時「いけません」とあわてて注意をされた。「アッ、そうだった。ここは国境だったのだ」急いでカメラをしまい込んだ。再び車は走り出す。間もなく鉄道の遮断機のような踏み切りが見えてきた。小さな小屋が踏み切りの前にあり、車は一時停車する。これがネパール領へ入国する関門なのである。片田舎のこととてのんびりしたものである。四囲海にかこまれている日本には見られない風景である。宿であった大阪の旅行団は入国手続き不十分で、ここから引き返さざるを得なかったそうだ。ほこりにまみれて丸一日を費やし、しかもルンビニも近いこの国境で

入国できなかったあの方達の疲れ切った顔々々を思い出す。

「ルンビニ」

車を降りた私達は原っぱを横切り、そびえ立つ菩提樹のそばにあるというマヤ堂へと向う。小さなマヤ堂、そのそばにあのお釈迦様が産湯をつかわれたという池がある。靴をぬいでマヤ堂を参拝する。お堂の中に誕生された時の模様が石にほられまつられてある。

マヤ堂の後に廻り、アショカピラーを拝む。丁度セイロンの参拝者がピラーをとりまき、お供え物を右から左の人へとぐるぐるお経に合わせ渡しているところであった。二三人のお坊さんは上座に座禅をくみお経をあげている。私達もその



ネパール近くの川の洗濯場

輪に入り、右手に廻ってくるお供物を左手の人に渡す仲間入りをした。やがてそれが済むと地面にひれ伏して拜んでいる。そこを離れた私はふと遙かかなたにヒマラヤの連山がうつすりと見えているのに気がついた。

ここが御生誕の地！「原っぱ」という言葉通りの土地にマヤ堂と池と菩提樹！何か淋しい気にならざるを得ない。ネパールの寺院が建てられてはいるが、この聖地にふさわしい建物とは考えられない。今ネパール政府は国連に協力を求め、大規模に美化する計画をたてているようである。

一時過ぎに車へつみこんであつたお弁当をとる。休憩所らしい建物のがらんとした一室で食べるお弁当も味がカサカサしてくる感じである。

帰途につく。車へのる時、何かしら近くの部落が騒がしい。何だか分らない。けれど早く乗るようにながされた。車は人ごみの中を除行しつつ通り抜ける事ができた。

再び田舎道を走る。国境の踏み切りで出国の手続きをとり、暫く走った時「マダム。象です象です」とあの親切な運転手は車を止めてくれた。象の背に草をうず高く積み上げ、その上に農夫がのり、ゆらりゆらりとゆれている姿。急いでカメラをとり出す。運転手が何か合図してくれたおかげで得

がたい写真をとることができた。

三時頃往きに手続きをとった部落の事務所で、再びインド領へ入国の手続きをすませ、またあの坦々とした道をドライブする。バルランプールへ着くのは夜九時頃という。何と遠いのだろう！静かなドライパーは疲れもみせず、黙々とハンドルをにぎっている。

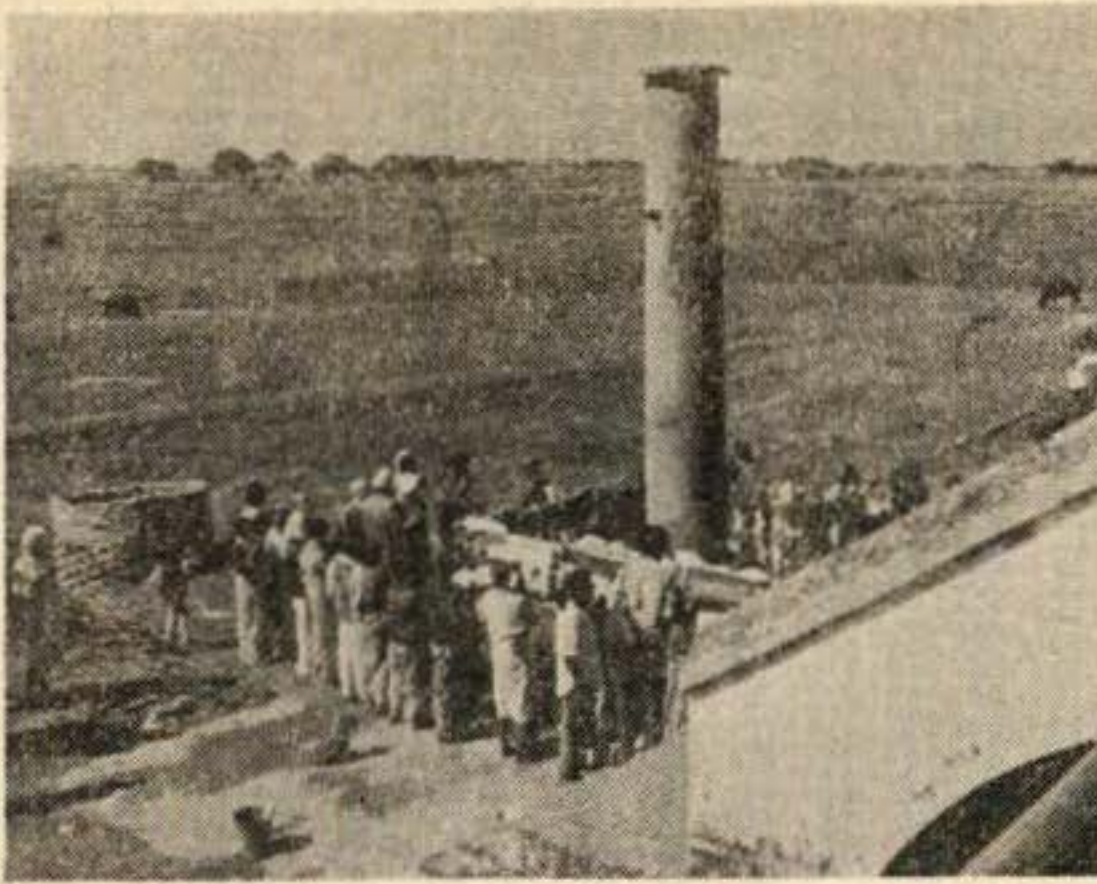
「領主の館」

前庭の広いどっしりとした構えの宿は、昔領主が客用に使用した邸という。立派な部屋が続いているし、調度も昔つかったままのものらしい。やれやれと広い部屋の次の間にあるこれも又、広い化粧部屋の一隅のお風呂にお湯を入れようと栓をする。ところが栓が古くてお湯がもってしまふ。ボーイをよんで、みてもらひたいとたのむとバケツにお湯をもつて来た。ボーイといっても、つつたつて私達を眺めている連中で立っているのが仕事みたいである。領主に仕えていた人達であろうか。

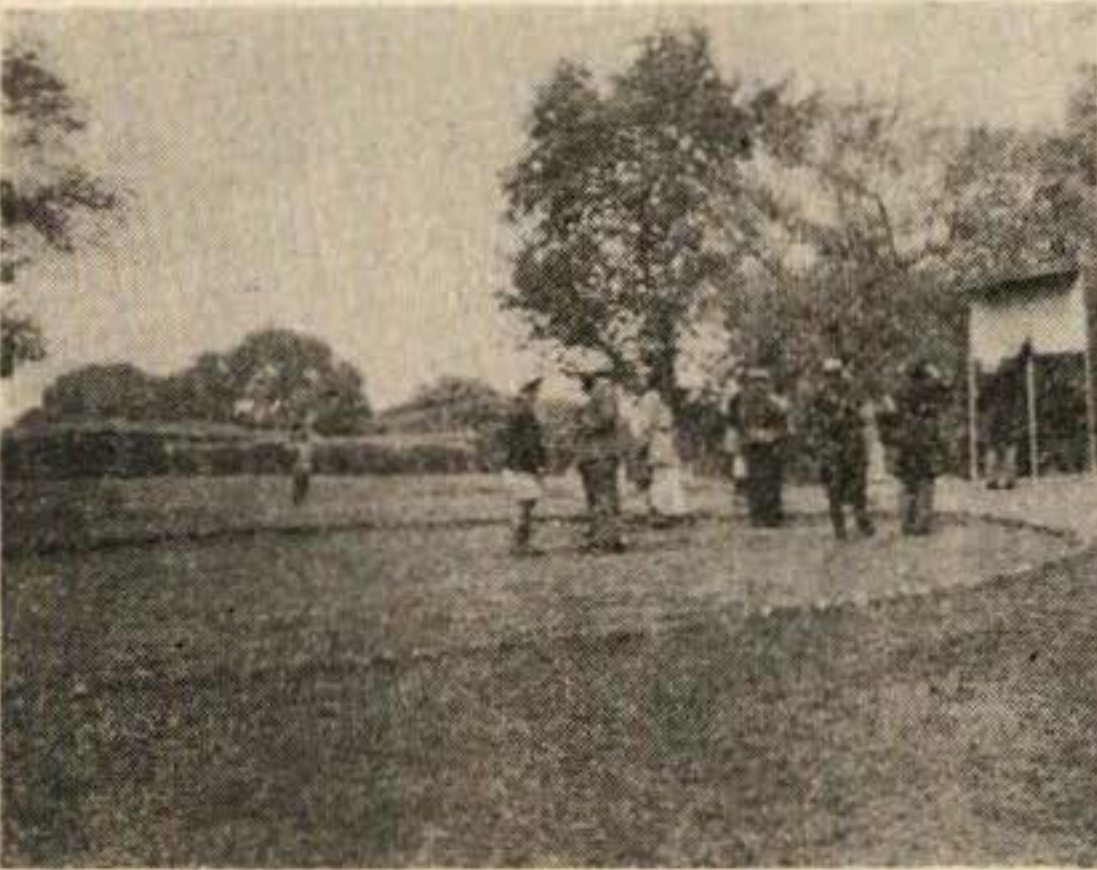
二十一日。よほどよくね込んでしまったらしい。気持よく起き上がることができた。朝食前の一刻をそつと庭へ出て朝露をふみつつ庭内を一巡りする。裏庭の真中の大きな立木が美事である。広い裏庭の向うに別の建物がある。召使い達の住

居であろうか、バケツをさげて若い人がひよっこり出て来た。表へ廻る。車寄せの様な玄関の屋根から円柱へとつるがからんでいる。ブーゲンビリヤの赤い花は総てが旧式なこの館に和らぎをもたらしているかのようである。

「舎衛城」



アショカピラーをとりまくセイロンの参拝団



祇園精舎の一部

朝食後、親しげに挨拶してくれるあの運転手の車にのりこむ。ゲストハウスをあとに田舎道を走る。道の左右に展ける田園風景は心地よい。やがてジャングルのような地帯へと車は入って行く。ここが舎衛城である。セイロンの見学の一団に会う。ジャングル地帯の様な荒地にレンガ造りの古い建物



舎衛城の遺跡

の遺跡が残っている。近くに住っていて説明をするというセ
イロンのお坊さんを迎えにインド人のガイドが行った後、発
掘された遺跡の下の穴へ若い方達はもぐり込んで行った。迎
えに行ったガイドが戻って来て「皆さんは？」「というので
「その穴から入って行きましたよ」というと大あわてで「あ
ぶないあぶない」と中へ「早く出て来て下さい」とどなる。
「私も早く出ていらっしやい」と大声をはり上げたが、何の
答えもない。「困ったわね」とうろうろとするばかり。毒蛇
も出るということで青くなっている私達の心配も知らない
で、丘の向側からニコニコと連れ立って戻って来られた。
「蛇？そんなものいませんでしたよ」と舎衛城で思わざる穴
もぐりの経験をむしろ喜んでいられる。

も一つの遺跡は建物の半ばより上部は破壊されているた
め、私達は足許に注意しながら歩きつつ、建物の中をのぞい
てみる。足をすべらしたら一寸のぼれそうもなく深い。あの
祇園精舎をお釈迦様のためにゆずってほしいと、たのみ込ん
でも仲々聞きとどけない地主の祇多太子に黄金をしきつめて
みせたという、あの給孤独長者即ち須達長者の館だけあって
「この一室全部に黄金を入れておいたんです」という部屋も
上からのぞきこんでみた。ジャングル地帯のこの遺跡の一角

に立ち見渡すと、平原は果しなく続いている。

「祇園精舎」

門の前で車を降りた私達にブラリブラリとした様子で近寄
って来る人達は、もじもじと案内書をさし出す附近の農民の
アルバイトらしい。広々とした土地にいくつもいくつも昔の
建物の基壇があり、いづれもナムバーをつけた英語で説明が
書いてある。近くに古井戸があり、水をくみ上げてくれて
「のみなさい」といいながら土地の老人が桶をさし出す。手
にかけてもらおう。昔使われたという井戸。今も深い井戸には
水が湧き出ているのだ。目の届く限りの基壇のまわりはきれ
いに掃かれ、大樹があちこちに繁って静かな場所に展開して
いる遺跡を番号順に歩いて行く。お釈迦様は雨季にはここへ
来られ、集まって来る千二百五十人余りの比丘達に講義をさ
れ、二十四回もここで過されたという。数え切れぬ基壇もそ
の頃のことを偲べば、どんなに大勢の人が集ったか容易に考
えられる広さである。二十五年もお釈迦様に仕えられたとい
う阿難の遺跡には、菩提樹がそびえていて「阿難の菩提樹」
と呼ばれている。仏阿難に告げたまわくの一文は、すぐ口ず
さむ位私にしみ込んでいる。浄土宗の三部経の一つの阿弥陀
経の世界に、今私達は立っているのだ。現地講義に花をさか

せている先生達の感無量のおももち。舎衛城といい、この祇園精舎といい、浄土宗の寺門にある私達の感激は一入であった。

「回教の都ラケノーへ」

再びゲストハウスに戻り、昼食をすまし、一時十五分出発。マンゴの並木通りを走る。この大樹の並木の美しさはインド北東部を旅行中、どんなにか目を楽しませてくれた事だろう。大樹の枝は四方に悠々と伸び、その中を通る道は車一台位走れる中央だけ補装されている。英国の植民地時代にこんな田園にも立派な補装ができたという。部落の近くでは子供達が落葉を掃いている。燃料にするのだろう。そういえば部落には大きな掲示板が出ていて二人の子供の顔を中心に両脇に父母の顔が大きく書かれている。目につき易い色でかかれ、どんな田舎へ行っても目に入る。これは産児制限の広告である。人口五億をかかえ、階級制度と貧富の差のはげしいインドでは子供を二人以上産まぬようにということなのであろうが、実際のどこまで理解されているのだろうか。こういうことも都市の一部の社会にのみ適用することではないだろうか。それにしても大きな、しかも派出な色の掲示板である。大樹の並木の向うは果しなく畠がつづいている。さとうき

びの収穫時期らしく、身丈よりも高くのびたきびをかり込んでいる部落もある。急に車が止まる。先に降りた方々が「結婚式ですよ」と声をかけ走って行かれる。私達も急いで車を降りると、丁度花婿が花嫁とまちがうかのように頭にかざりをつけ、父親に附添われ道路へさしかかったところであった。了解を得て写真をとらせてもらおう。未だ子供っぽい顔の花婿さんは恥かしそうである。このあたりは回教徒が多いのだろうか。回教のお墓が畠の近くに点々と見える。

果てしない大平原の夕空は美しい。六時四十分ラケノーのカールトンホテルに到着。八時夕食。ここでは日本人の私達に好意を示し、焼きそばに似たものが供される。食器の模様も竹。仲々の日本人びいきらしい。ここもまた避暑地に見られる、あかぬけたホテル。花が咲き乱れる芝庭の美しい事。テラスから眺める月の美しさ！ベナレスのクラークホテル以来ホテルらしい落付きのある、その上あのチップをほしがるベアラもない気楽さを味う……。子供も三人いるとか結婚の習慣を話してくれたあのドライバー。お祈りをしつつハインドルをにぎっていた人。三日間私達と一緒に過したあのよい人柄の運転手さんともアグラへ向う時別れるのである。忘れられぬよい思い出を残してくれた人である。



眞実にいきる

矢代栄信

(一)

人生とは人間的に生きることである。その人の日暮しが、ただ肉体が存続するだけのものであるならば、それは生理的存在であつて、人間的に生きること、即生活とはいえない。価値あるものを生産するところにこそ人間の生活があるのである。

また、生きるということの实体は、「時」の上からいうならば、「現在」である。過去は消え失せたもの、未来はまだ来らないもので、あるものは、ただ現在だけで

ある。

そこで、現在をいかに暮すかということが、人生においてもっとも重要なこととおもわれる。

大智度論に、つぎのような物語がある。

雪山のふもとに夜明造巢という鳥がいた。この鳥は一日中ただぶらぶら遊びまわつて、何にも仕事もせず巢も造らない。ところが、夕方になると、雪山から冷い風が吹いてくるので、寒さにふるえて、この鳥は「夜が明けたら巢を造ろう造ろう」と悲しげに泣くのである。しかしながら、いよいよ夜が明けてみると、前夜の苦しきか

たことは全く打ち忘れて、やはり巢を造らず一日中遊びくらすのである。そして、夜になればまた「夜が明けたら巢を造ろう造ろう」と泣くところから、こんな名がついたといわれる。こんなふうにより毎日ただぶらぶら遊び暮していたが、遂に最後の日がおとずれた。それは雪山おろしのはげしい吹雪の夜であつた。この鳥は寒さにこえて声を限りに、夜明造巢！ 夜明造巢と泣いていたが、暁近いころ遂に喉から血をはいて死んでしまった。

これは、過去もかえりみず、未来もおもんばからずに、毎日毎日ただうかうかと遊び暮す怠惰な日暮しをするものを誡めた物語であるが、このような生き方は、酔生夢死であつて、その現在は全く無生産であるから、そこには人生はない。

(二)

現在が、過去にくらべて苦しいときには、私達は、よく過去の楽しかったことを思い出しては、現在はどうしてこんなに苦しいのであらうかと嫌うことばかりいうの

である。これが、いわゆる愚痴の生活である。老年になれば、人は愚痴な日送りをしがちであるが、それは老衰のため創造力は涸渇し、希望はなくなつて、過去の記憶だけがつよくはたらくようになる。そこには過去の苦しかつたことは記憶から失われ、楽しかつたことだけが、記憶に残るといふ忘却の心理が作用するのである。

そのため過去は美しくなつたものとなり、それが現在の苦しみをつよくする結果、愚痴が多くなるのである。

また逆に、未来に怖い出来事を予想して、人はこれに氣を取られ、現在には何事も手がつかず、そのために空しく暮すのである。何が非常な心配ごとがあれば、つぎつぎに氣にかかることが想像されて、これらのことで心は奪われ、人は憂愁に沈むのである。

おもえば、過去や未来を考える作用が全くない動物は、現在の生活に没頭して、過去に苦しめられたり、未来に悩まされたりすることはない。その生活はまことに平安ということもできよう。平安ということが生活の理想であるとするならば、人間より動物の方が、かえつて幸福であるかもしれない。

しかし、私達は、人間よりも動物に生まれることが望ましいとは決しておもわない。

「満足せる豚であるよりも、不満足な人間であることの方がよい。満足せる愚者たらんよりは不満足なソクラテスでありたい」

とは、ミルの有名な言葉であるが、生の実質は現在よりほかにはない。いかにしたならば現在に有意義に生きる事ができるであろうか。

(三)

現在ということを考えてみよう。現在は過去と未来との間にはさまれている「時程」と一般に考えられている。この場合の過去と未来とが次第に接近するときは、現在の時程はいよいよ短くなり、その極限においては、現在は過去と未来との接合点に過ぎない。それで、ふり返る瞬間、現在は過去となり、ふり向く刹那未来となり、現在はあつという瞬間にすぎぬ時となる。しかし、この考え方は過去現在未来を継続的に排列して見たまでであつて、いわば死んだ時間であり、概念の時間で

ある。

私達が体験するところの生きた時間は常に生命の内部に流動しているので、そこに人は生命の動きを感じるのである。実際には現在を離れては過去も未来も経験することはできない。「昔を今になすよしもかな」とは過去に帰ることが絶対にできないことを示している。また未来も経験することはできない。

ロングフェローの詩に、つぎのような物語がある。

少女が母親にたずねた。

「お母さま、明日とはいつのことですか」

すると母親は

「それは、おまえが今夜眠って、目が覚めて明るくなつていた時が明日だよ」

と答えた。少女はこの答に得心してすやすやと眠り、いよいよ明けの朝となったときに少女は云った。

「お母さま今が明日ですか」

母親はこの少女の言葉には当惑した。しかし、

「いやいや今は今日であつて明日ではないのです」というより仕方がなかった。

過去と未来とは概念として考えることはできるが、直接に経験することはできないようである。

しかし果してそうであろうか。生命はたえず流動している純粹な持続である。過ぎ去りつつあると同時に進みつつある。過ぎ去る方面が過去であり、進む方面が未来である。それで、現在に即して過去と未来とが経験されるのである。

私達が時の流れを経験するのは、現在の中に過去と未来とを直接するからである。

今の中に、未来を生じ、過去をみるからである。

(四)

このように考えてくると、過去と未来を統一することが、人生の大切な問題となってくる。

現実と理想の矛盾に現実我と理想我との対立から生ずる。それでその理想も相対的のもので、現実的理想ともいふべきものであつて、どこまでも現実と相争うものであつて、現実を克服することはできない。

真の理想は現実を生かし、現実を救うものでなくてはならない。この矛盾は相対的我がなくなることによって解決されるのである。

我執がなくなるときに真実の生命の活動があらわれくる。一切の苦悩の根本は我執にある。ゆえに仏教には無我のおしえが説かれているのである。

しかしながら、無我とは虚無ではない。相対的な我が存在しないという意味であつて、この我が否定されるとき、おのずから人をして人ならしむる真実の我すなわち仏性がはたらきだすのである。

釈尊はつぎのように、過去、現在、未来を一貫する生命の真実の流れについて説かれている。

過ぎ去れるを追い合うことなかれ、未だ来らざるものを待ち設くることなかれ。過去は過ぎ去り、未来は来らざればなり。

ただ、現在の法をみよ。

現在の法とは、過去と未来とを統一した永遠の現在である。この三を一貫の生命の法によりて生活するとき、生は真に充実されることになる。



和来ばなし

かえらぬ帽子

汽車の旅をしているとき、腕白ざかりの息子が、窓から首を出すので、父親は、

「危いノ坊や、そんなに首を出すと落ちるよ」

と注意すると、坊やは

「うん、大丈夫だい」

と行って、いくら止めてもいうことをきかない。始末に困って背後から子供の帽子をとりあげて隠してしまい、父親が「ホラ帽子が落ちちゃった」

というと、子供は、急に火のついたように泣き出してしまっ

た。またまた当惑してしまった父親は、今度は、口笛を吹くと一緒に隠した帽子をとり出して見せて、子供にいった。「もう泣くんじゃないよ。父さんが口笛を吹いて呼んだから、ソラ帽子がかえって来たよ」。

それからしばらく子供がおとなしいので、父親はほかの客と四方山の話に花を咲かせている間に、突然子供が叫び出した。

「父さん父さん、帽子を窓から投げてしまったよ。また口笛を吹いてちょうだいね。父さん」。

借り一文なし

あるところに「一文」とよぶ珍しい姓の老人があった。滑稽家で仲々の負けずぎらい、近所の茶目公が一夜、ひそかに「一文」と書いてある表札の下に「無し」と落書をした。

さて翌朝、茶目公がそしらぬ顔で行って見て驚いた。「一文無し」の上に「借り」と大書してあった。

悪事露見

小学校の校長室の卓上の電話のベルがチリチリとなった。

校長「もしもし」

電話の声「ああもしもし、あなたは校長先生ですか」。

校長「ああ、校長ですが……」

電話の声「ああ、そうですか。甚だ突然でございますが、尋常六年生の丸井三吉が風邪を引いて熱を出していますので、今日は休ませたいとおもうのです」

校長「はあ、そうですか。あなたは、どなたですか」

電話の声「はい、僕のオトウサンです」

逆襲

夫「お前は外出するたびにあの汚いチンを引張ってゆくが、一体ありやどういうわけだい」

妻「別にわけも何もありませんわ。唯なんといったって私には可愛いチンですもの」

夫「大方、あのチンを連れて歩いたら、お前の顔がきれいに見えると思ってるんだらう」

妻「あてごとなんか仰言らないで下さいよ。実際、そんな

意味だったら、私はむしろ、あなたと歩くわよ」

馬からの電話

中年の夫婦。御亭主はよく寝言をいう癖がある。つい先頃も、かれは「小浪」という名前を一晚のうちに二度も三度も口走った。

怪しんだ奥さんが、翌朝、それを詰問すると、

「ああ、それは競馬の馬の名前だよ。大井の競馬へよく行くだらう。速い馬でね」

と見事に誤魔化してしまった。

ところが、それから一週間ばかりたったある日のこと、会社から帰ってきていつもの通り、

「今日は何か変わったことは無かったかい」

というと、奥さんがジロリと顔をみていった。

「ええ、別に変ったことって無かった」

「ああ、そう」

「唯、おなじみの馬から二度も電話がかかってきましたわ」

ふる里紀行

《 3 》

東北の二

歴史の町——桑折こおり

青 柳 良 憲

(福島県伊達郡桑折町在住)

其の夜飯塚にとまる。温泉あれば……

馬借りて桑折の駅に出る……

(奥の細道)

元禄二年、芭蕉が門人素良を伴って奥州行

脚に出た際、五月二日飯坂温泉に泊し、翌朝

わが故郷桑折を通過し宮城県に入った事を示

す一文であります。福島県の最北部・伊達郡

に位置しているのが桑折で、汽車で駅を二つ

下れば県境となるこの地は、西に半田山を仰

ぎ、東に阿武隈川を見下す高台に存し、非常

に歴史に富む町と申しても過言ではないと思

います。「桑折」という町名から察せられる

様に、県北他町村と違わず、養蚕が盛んであ

り、それに加えて金銀を採掘する半田山は、

日本三大銀山の一つとして江戸幕府の直轄地

に指定保護され、そのため桑折には代官が置かれ、明治初年に至るまで当地方の重要な地位にあったのです。これと相俟って町自体は地理環境の上から、街道の要所であり宿場町としても知られ、白河から桑折までの陸羽街道は、桑折を起点として陸前街道(仙台方面)と羽前街道(米沢方面)に分かれています。

NHK TVで「樅の木は残った」が放映され、仙台藩伊達家を舞台として広く我々に視聴されておりますが、独眼竜政宗は十七代であり、そもそも伊達家の始祖が桑折の里から出ている事は余り世に知られていません。文治五年より源頼朝の勢力下になった当地には論功の結果、中村常陸介入道念西朝宗(茨城県真壁郡伊佐の領主)が支配を命ぜられました。朝宗は、桑折の西方高館山に築城し、伊達の郡名に因んで姓を中村から伊達に改称し以後、米沢を経由して仙台に移封されるまで

代々この地を居城として伊達地方を支配したのであります。大祖朝宗の墓は、高館城下に現存しており、四代政依は、東昌寺を始めとする五ヶ寺(伊達五山)を建立し、朝宗夫人や一族の菩提を弔ったのであります。現在は観音寺一寺のみがこの地に残って、念仏易行の門を開いております。

さて我々浄土教念仏者の同信に取って忘れてはならないのは、江戸中期の律僧無能上人が、桑折にて出家得度され、広く念仏門をもつて民衆を化導されたことであります。郷土及び浄土宗の誇り得る傑僧無能上人は、日課念仏十万余を称えられ、一万声毎に特に語を高め発願回向を用いて、発心してからの日課の数を記して総計を明らかにし、一生の自修念仏はおよそ三億七千万遍になるといわれております。更に信徒への名号染筆は、日課誓約の上、各人念仏成就の時に授けられたということでありますが、当町の上人開山の無能寺が本年五月子供の失火により惜しくも本堂全焼の災禍にあったことは本当に残念でならず、念仏興隆を期する者として、一日でも早く復興することを念願する一人であります。



道

高橋良和

勝林院への道

洛北大原の紅葉も見ごろのときである。

このごろは、春秋だけでなしに常時の観光客があるので、ここ大原の里は、大晦日、元旦の別なく人で一ぱいである。

であるから、ゆっくり、往生来迎院の庭や三千院の寛の水の音を聞くことも出来ないようであるのは淋しい気がする。

ところが、そうして院の前を通りぬけて、律川（りつせん）にかかっている橋を渡った正面にどっしりとおちついたお堂が眼につく。

これが勝林院の本堂である。

この勝林院の本堂でその昔法然上人と顕真法印との問答が行なわれたのであるが、顕真法印はこの地にあつて、法然上人の説く念仏に対して疑問をもち、ここで討論会を開いたのが名高い大原問答といわれるもので、或はデスカッションのはじめになるかもしれない。

この大原の里は、京都からバスで三十分ぐらいのところ、全く幽邃の地である。特に勝



林院の近くの三千院は、山を背した瑠璃見庭の庭が見事であり、一カ月余にわたる木々の紅葉は実にすばらしい。

然しこの里には昔から比叡山の隠遁者たちの集まったところであって、若狭、越前、すなわち、福井県に向う要路の場所であつたからでもあらう。

法然上人はこの勝林院に出かけたときは、おそらく一生一度の劇的な討論会だけに相当な用意があつたことと想像される。

もちろん我々の如き不勉強の輩でないのであるから、ことさら書物をひもどき、頭を整理する必要のない方であることは、百も承知しているが、然し公開討論会とあればこの里への足の運びにも真剣そのものであつただろうと失礼ながら想像するのである。

今のように大原は開いていなかった。比叡を下つてこの勝林院に向う法然上人は五十四歳、一方の顕真法印は二つ上の五十六歳、ともに円熟のお二人である。

丈六の仏像の両側に坐すこの二人の僧、もちろん、そのうしろには、天台の荒法師もいたであろう、浄土の求道僧もいたであろう。

全く緊張のひとつときである。

そのとき法然上人の弟子の熊谷蓮生は、もし師の御師である法然上人にもしものことがあつてはと心配のあまり、鉈をもつてこの会座につらなっていたらしい。

というのは、この問答が終つて、法然上人の念仏に共感をもたれた顕真法印が、問答が終つたあと、座を立て、この丈六の本尊さまの前を行道する先進をつとめたとき、熊谷蓮生はもっていた鉈を、そのお堂のうしろの竹藪に捨てたらしい。

それが今でも残っているので、鉈捨ての藪というのがある。



この問答のあと念仏して行道する法然上人、顯真法印、それに参加の僧侶の念仏の声が、山谷にみち溢れたといわれている。

この勝林院に参詣して、本堂の丈六の阿弥陀如来を拝がみ、ふとその脇をみると、問答台が残っている。この台の上に登った二人の僧の姿が想像されるのである。念仏の奥義を述べる法然上人の眼ざしはうちふるえていたかもしれない。

勝ち、負けの判定ではなくとも、この問答で法然上人の念仏がそのとき、根底からくつがえされたようなことがあれば、浄土宗はどうなっていたであろうか。法然上人のお姿をこの問答台の上に想いうかべてみたのである。

色ずいた紅葉の木々を通して、かすかに念仏の声が流れてくるような感じさえうけた。

この丈六の阿弥陀如来は、仏師康尚の作といわれている。

特に興味あるのは、ここにある踏出し阿弥陀如来という仏さまである。この阿弥陀如来は、あの大原問答のときに、自分の御足を一步踏み出されたといわれている、珍らしい姿のものである。

この勝林院のあたりは、慈覚大師が入唐してもちかえった声明（しょうみょう）をつたえたところである。声明は日本音楽の源流となったもの、大原はそうした意味でも日本音楽の発生のところである。

その証拠に、このあたりでうたでもうたうと、たしかにのどの発声が楽であるといひはなしを聞いた。

なぜだろうか、それはこの地に湿気が多くて、のどがいつもうるおうからなのである。とも角もよき里である。

応仁元年（一四六七）世はまさに大乱により騒然となり、ここに戦国時代へと突入していった。京都は戦火の中心地として殆んど焦土と化した。清水寺・青蓮院・南禅寺・知恩寺・三宝院などをはじめとした諸大寺は相ついで焼失してしまった。

知恩院も応仁元年九月、兵火によって諸堂は悉く炎上してしまつた。

ときに、知恩院二十三世周譽珠琳は当院も到底兵火よりまぬかれないことを知った。そこで法然上人尊像、その他の什宝類を持って滋賀県伊香立に難を避けた。そして当地に大谷山華頂寺新知恩院を開き、尊像を安置し戦乱の止むをまつたのであった。この立像は一名「鏡の御影」と称されるもので、丈一尺五寸三分、台座の高さは一尺五寸で光背があり、厨子の中に安置されている。

法然上人の御影といわれるものを多く拝してはいるが、一度、この新知恩院の「鏡の御影」を拝したなら、誰しも法然上人の御教えが心の奥におのづから浸透してくる心地する。それほど素朴な中にも気高さがあり、心を引きつけられる。

戦乱中とはいえ光琳は知恩院復興に努めた。再建成り伊香立を出発することになった。ところが前夜の夢に、この立像ならびに靈宝を当地にとどめおけよとの靈告によってそのまま当寺の本尊としてとどめたといわれている。いままも新知恩院は叡山の東麓の小高い台地にあり、閑静なたたづまいの中に雄姿を残している。（佐々木洋之）

御年始のご挨拶がわりにご用を

『浄土宝曆』

・一部25円（50部以上より単価22円）
・送料実費 B・6版 40頁

『修養めぐり』

・一部百円（会員のかたは90円）・送料実費
・円紙33枚タテ37cmヨコ13cm
・見本お申しこみは百五十円お送り下さい

お早目にお申込み下さい

発行所 法然上人鑽仰会

電話(03)二六二一五九四四番

——法然上人立像——
《鏡の御影》——



伊香立 新知恩院藏

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一力年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年十一月二十五日印刷
昭和四十五年十二月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

日本仏教の成果 浄土教のあけぼの

覆刊のあいさつ

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局長 小林 大 巖
浄土宗宗務総長

「浄土宗全書」正統兩篇全巻の覆刻頒行発願以来二十余年、三四師友の契働を忝うするも、該の資金面に困苦を覚ゆ。関連の近親宗派や、其他に援助を要めようにも、容易にその意をえず、仏祖の慰護と有縁の扶翼を念じつつ、浄土宗開宗八百年を目睫に迎え、焦心しきり願意の暢達をして止まず。折から昨晚秋、有限会社山喜房仏書林代表取締役青木正雄氏から、師友を介して、該全書全巻の覆刻刊行に必須の財的法的などの一切責任荷負をはじめ、関連諸般の悉皆責務を社をあげて負担に当り、浄土宗や一般人士や社会に対しては、商賈営利を度外視して仏教精神の伝弘に立脚し、念仏信行の策勉奉仕に、赤誠一貫の確約で、覆刻発行に挺身従事の切望申請と、同願師友の激得に依恃し、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局の出版事業の一として、内外大方の覆刻刊行要請に応えるべく、初巻配本を、法然上人聖誕日の四月七日と定めて宿志の具現に、山喜房仏書林の切願を聴諾したのである。この覆刻刊行に際し、師友を煩して、底本の由来や校正の顛末解説や爾来の研考様子の等々を、その責任分担で附すを念いしも先ず覆行をと急ぎて、夫等是他日を期した事情を諒察されたい。

いささか覆刻刊行の来由を略述して、念仏教学の師範人生行路の指標、教化振作の洪軌と仰ぎつつ、先聖の慈悲に報告して、信解行証の策勉を希念してたえない。

浄土宗全書

正 続
四十二巻

- ・ 予約申込規定 全四十二巻予約申込のみに限り出版します。
- ・ 定 価 各 巻 2,000円
- ・ 刊 行 期 日 昭和45年4月7日第一回第一巻発行 / 御申込みは下記発売所又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。 / 内容見本進呈

発 行 所 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

発 売 所 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4 東大赤門前
TEL 03-118-5361 振替東京1900